

の ED は同一根面に非連続性に複数個形成されていることもあった。単純 ED のほとんどはセメント質に覆われており、表面からの目視は困難と思われた。なお、歯根表面が小窩状に陥凹した部分に単純 ED が形成されていることもあった。単純 ED は舌側よりも頬側での形成頻度が高いように思われた。

複合 ED のみられたのは 4 歯で、いずれも一歯に単数個みられ、周囲に厚い二次セメント質が形成されており、両者の間には深い裂溝が形成されていた。また、非連続性に単純 ED が形成されているものもあった。なお、同一歯で複数個の複合 ED をみることもあるようだが、このような例は文献的にはわずか 3 例の記載をみるにすぎない。以上に加え、エックス線の複数の複合 ED をみた症例を供覧した。

考察：歯の形成期に臼歯の咬頭頂付近で始まる近遠心の頬面隆線が下降して臼歯稜に移行し、さらにエナメル器の一部が根面溝を覆うように伸長し、断続的にエナメル質を形成し、これが ED となるものと思われた。しかし、単純 ED と複合 ED との違いが如何なる機序によって生じるのかについて言及するに足る所見は得られなかった。なお、文献的には同一歯での複数個の複合 ED 例や多数歯にわたる複合 ED の記載もあるが、内外でこのような症例はきわめて少ない。

2. 加齢変化によるミトコンドリア蛋白 Prohibitin1 の翻訳後修飾と脂肪滴形成に及ぼす効果

Post-translational modification of mitochondrial protein, PHB1 affects lipid droplets formation

○小笠原 正人*, 金 将* ** , 入江 太朗**

岩手医科大学薬理学講座病態制御学分野*, 岩手医科大学病理学講座病態解析学分野**, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野**

【背景】肺線維症、慢性閉塞性肺疾患など慢性肺疾患の進行には加齢要素が深く関連している。加齢現象には遺伝子変異、オートファジー

など多くの要素がかかわっている。II 型肺胞上皮は肺障時には幹細胞に様な働きをし、部分的な肺再生に寄与することが知られている。II 型肺胞上皮は脂質とタンパク質からなるサーファクタントを産生している。脂質の細胞内分布は脂肪滴の形で供給される。遺伝性間質性肺炎(肺線維症)ではサーファクタントの形成不全と脂肪滴の過剰生成が報告されている。我々はミトコンドリア蛋白質の Prohibitin1 (PHB1) 蛋白質に注目し、アスパラギン残基の脱アミド化による翻訳後修飾の脂肪滴形成に対する効果を検討した。

【方法】アスパラギン残基の脱アミド化はアスパラギン酸残基に変化する。アスパラギン残基をアスパラギン酸 (N24D および N226D) に変えた PHB1 を発現する安定細胞株を樹立し、ミトコンドリア形態、脂肪滴の形態、脂肪滴関連蛋白質 perilipin-1~5 の遺伝子発現を検討した。N24D 変異を認識するモノクローナル抗体を作成し、加齢マウス肺での発現を検討した。また、加齢マウス肺での脱アミド化アスパラギン残基に検討を行った。

【結果と考察】N24D および N226D 発現細胞では癒合拡大した脂肪滴の増加と脂肪滴形成に関与する蛋白質 perilipin-1,-2,-3 発現の増加、perilipin-4,-5 発現の低下を示した。加齢マウス肺では N24D 変異型 PHB1 の増加が認められ、PHB1 N24D 変異は脂肪滴形態を変化させ、加齢現象との関連が示唆された。

3. 舌に生じた成人型黄色肉芽腫の 1 例

A case of adult-onset xanthogranuloma of the tongue

○高橋 美香子****, 中山 温史****,
小原 瑞貴****, 山谷 元気****,
阿部 亮輔****, 阿部 亜希****,
八木 正篤****, 山田 浩之****,
武田 泰典****

岩手県立磐井病院歯科口腔外科*, 岩手県立中央病院歯科口腔外科**, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野***, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野****

黄色肉芽腫は、組織球の増殖とそれらに脂質の蓄積を伴う、皮膚に好発する肉芽腫性病変で、単発性または多発性に、表面平滑な丘疹や結節として発生する。一般的には乳幼児期、小児期に発症し、若年性黄色肉芽腫の名称で知られているが、成人の発症例もわずかながら報告されている。口腔領域での発生は非常にまれで、臨床所見から診断することは困難な場合が多く、報告例の多くは術後の病理組織学的検索で黄色肉芽腫と診断されている。今回われわれは、成人の舌に生じた黄色肉芽腫の症例を経験したのでその概要を報告する。患者は30歳代女性で、約3か月前より右側舌縁の腫瘤に気付くも疼痛がないため放置していた。縮小傾向がみられないため、近在歯科医院からの紹介により当科を受診した。初診時、右側舌縁に直径8mm、弾性軟で可動性のある腫瘤を認めた。表面は正常粘膜色で、一部で内部が淡黄色を呈しており、腫瘤周囲は白色を帯びていた。また、前方には直径4mmの線維腫様の腫瘤を認めた。これらの所見より、舌の良性腫瘍の診断のもと切除を行った。組織学的には筋の表層に形成された境界明瞭な病変で、大型で類円形の細胞と小さな長円形の細胞の密な増殖からなり、細胞質は泡沫状を呈していた。さらにTouton巨細胞もみられ、増殖細胞は免疫染色でCD68抗体に陽性であった。病理組織診断は黄色肉芽腫で、前方の腫瘤は上皮の乳頭状過形成であった。舌縁は機械的刺激が加わりやすく、上皮の乳頭状過形成と併発したことを考慮すると、舌への慢性的な機械的刺激が発生原因のひとつと推察された。2年半経過した現在、再発は認めていない。

4. 小唾液腺由来粘液嚢胞に対する凍結療法の臨床成績

Clinical results of cryosurgery for mucocoeles of minor salivary glands.

○山内 博仁, 川井 忠, 角田 直子,
小原 瑞貴, 鈴木 舟, 宮本 郁也,
武田 泰典*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部
口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野*

要旨

【緒言】

小唾液腺由来粘液嚢胞に対して凍結療法を行った治療成績について報告する。

【対象と方法】

2019年1月～2020年3月に粘液嚢胞の臨床診断となった47例中、凍結療法を希望した24例を対象とした。局所麻酔は行わず、病変の冷凍凝固30秒を1回に2～3度繰り返した。病変が消失するまで経過観察し、処置は1～2回行った。消退傾向がみられない症例については摘出術し、病理検査を行った。

【結果】

患者の最少年齢は2歳、最高年齢は83歳、平均21歳であった。24例中22例は凍結療法で病変の消失がみられた。奏効率は91.7%であった。術後の出血や神経障害は見られなかった。摘出した2例の病理標本では、嚢胞周囲の慢性炎症、瘢痕組織、また小唾液腺の萎縮が確認された。

【結論】

凍結療法は、低年齢患者でも外来で簡便に行える処置であり、粘液嚢胞に対する有効な治療法の1つであることが示唆された。

5. 上顎正中に過剰歯3本認めた1例

A cace whit three excess teeth in the maxillary midline

○笹村 祐杜, 宮本 郁也, 山谷 元気,
角田 直子, 小松 祐子, 川井 忠,
藤村 朗*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部
口腔医学講座歯科医学教育学分野*

【目的】：今回我々は、上顎正中部に3本の過剰歯を認めた症例を経験したのでその詳細を報告する。

【症例の概要】：9歳女児、歯の萌出に疑問を感じ近在歯科医院を受診し、正中過剰歯を指摘され当科紹介受診となった。既往歴に特記事項はなかった。CBCTにて、上顎正中に1本が埋伏、2本が萌出した円錐状の過剰歯を認めた。歯列